支部活動の思い出

思　い　出

函館海洋気象台　斉　藤　　実

17年ぶりに北海道へ戻ってきて、気象学会北海道支部が30周年を迎えると聞いて、いつの間にか時は過ぎたものよと感概を覚える。支部発足の昭和32年は、ちょうど私が札幌管区気象台に入った年でもある。だから、支部活動の思い出は、私の若い頃の思い出でもある。むかしを語るのは老化の兆しといわれるが、それは自認しているところであるし、30周年記念に免じて思い出の幾つかを書かせてもらう。

昭和32年の暮に、管区気象研究会に引き続いて最初の支部研究発表会が開かれた。この会の最後に、中谷宇吉郎先生が「グリーンランドの雪と氷」の話をされた。カラーフイルムが気軽に使える時代ではなかったが、使用された沢山のカラースライドの色彩の美しさと、ユーモアと示唆に富む講演に魅了された。初めての研究会だったためか、進行が遅れ夜遅くまでかかったが、満員の聴集が最後まで残り、さすが話す「名随筆よ」と感心したのを覚えている。私はこの研究会に触発されるところが大きかった。それ以後、当時問題になっていた「煤煙」の放射的特性を調べ始め、翌年の研究会で初めて研究発表なるものを行ったが、新聞に大きく取り上げられたのでびっくりしたものである。

昭和36年の春の気象学会の大会は、北海道で開催された最初のものでなかったかと思う。会場は北大理学部本館であった。私は気象台調査課に属していたから、自らの発表よりも、受け付けなど事務局的な仕事で駆け廻った思い出が強い。初めて全国大会に出席して、高名なあるいは気鋭の研究者の多くに接して緊張を覚えた。

昭和40年の国際雲物理会議は私の在札中の北海道支部最大のイベントであった。ＩＡＭＡＰ－ＷＭＯ、日本学術会議および日本気象学会四者共催で行われ、外国からの参加者が約１００名、総勢３００名の大会議であった。10日間の会期の最後の３日間は札幌で行われたが、これは中谷先生に始まる北大の雲物理学研究に対する大きな貢献に敬意を表して実現したものであった。北大の孫野教授以下のスタッフは自分の研究発表だけでなく、会議の運営、外国研究者との交流など大変な忙しさだったと思う。孫野先生達の師（中谷先生）に対する敬愛の情に深く触れる想いがした。気象台はこの会議では事務局に徹したが、初めての国際会議であり、戸惑うことが多かった。調査課調査官の岡林さん（現高層気象台長）は事務局の中心として大変ご苦労された。北海道支部長であった神原台長はこの会議の札幌開催に尽力された。当時から気象台では学会関係への予算支出が厳しい状況にあったが、先遣隊として東京の会議に職員３名を派遣するなどの措置をとられた。いろいろ学ぶことの多い会議だった。

支部発足当初、大学と気象台とでは研究対象や方法の違いが大きく、支部研究会も嚙み合うものが少なかった。北大の気象学教室が軌道に乗り、スタッフも揃ってくるにつれて研究対象が拡がり、気象台と同じテーマの研究をすることがでてきた。昭和30年代後半の勇払原野の「霧」、石狩湾小低気圧など「降雪の機構」などがその例である。こうしたテーマについては、支部シンポジウムなどを開き意見交換しながら研究を進めた。地域に密着した問題を大学と気象台が交流しながら研究を進めることに支部活動の意義を感じた。

最近、私は気象学会の活動から遠くなっているが、北海道支部は啓蒙普及活動も盛んで、以前より活動範囲が拡がっているのを感じている。30年といえば人間なら成熟期である。今後も着実に活動を進め、同じ地域に住む会員が交流を深め、研究の進展を計ってゆくことを希望したい。

思い出にでてくる幾人かの方は既に亡い。心から冥福をお祈りする次第である。

30年を振り返って

淵本　一

30年前の気象学会員の大部分は、気象庁関係者で占められ、北海道の支部長も、気象台の技術部長がなるような不文律があったようで、自然発生的に私が支部長にならされた。

私の無能と、現在のような意欲的な学術関連のなかった当地での活動は何もなかった。と云うより気象学会よりも他の研究や行政機関宛の発表の方が優先したので、何も出来なかったといった方が適切だった。

当時の北海道は、急に開発庁が新設されて、北海道開発5カ年計画などが真剣に企画され、道庁の係長だった若い職員が、老練の大牧場主と対抗して知事の座を勝ち取り、将に、クラークの名言が地で行く勢いであった。一方学術研究では、林野庁が主体となって、防霧林設立策の大テーマに、北大低温研を中心に同大理科系を挙げての協力。気象台も研究陣の大部分がこの実験に当り、根釧原野厚岸海域に大調査網が4年に亘って展開された。他方、自然界では、十勝沖大地震津波、洞爺丸台風、浦河沖漁船二百隻の大海難と世界的な大事件が続発するし、行政面では、積雪・寒冷度による補正（地方補助金四号補正）金の、新潟方式を北海道方式に改正する運動。水力発電の積雪科学調査。TVの北海道導入による電波伝播の海面擾乱・空中ダクト等々の研究。そのどの一つをとっても、学会の大研究に値するものが頻発している。勿論、防霧林の研究では北大から膨大な英字論文集刊行。気象庁も欧文彙報にその一端を発表、林野庁からも堂々たる総合成果報告がある。その他の事件もそれぞれ数百頁に及ぶ刊行物や研究報告書が関係機関より発刊されている。それ程の時代に日本気象学会には発表がない。当時学会本部から、私の無能振りへの叱責のあったことを覚えているが、その時は私は北海道でのワンマン振りの人事異動で東京に呼び戻されていた。しかし愚考するに、現在の日本気象学会でも、大突発地球物理学的現象に対応して学術行政的に速応する方策が講ぜられているだろうか？財的スポンサーへの偏傾報文に流され勝ちが多くなり、気象学会への必然的発表をシステム化する方策が講ぜられる必要があるように想う。三十年前の旧弊の者を想って敢えて、このことを提言することにより、当時の私の無能の償いとしたい。妄言多謝。

昭和40年頃

高層気象台　岡林俊雄

気象学会北海道支部の30周年記念に、支部だよりに何か投稿を、というお便りがとどいたので雑文を書くことにした。開けないで引越の都度そのまま運んでいた、札幌時代の古い雑誌類の入っているダンボール箱を開き、「支部だより」を探すことにした。それは昭和40年頃、私は札幌管区気象台の調査課調査官で、学会の雑用係として、支部だよりの編集を担当していたことを思い出したからである。

出てきたうちの一冊は「北海道支部だより」№6、昭和41年5月号、30頁のものであった。第1頁に支部役員会の記録がある。

第３回支部理事会、昭和40年11月26日、於石田屋

出席者

神原　健、孫野長治、小泉政美、井上力太、吉田順五、小野寺晶夫、黒岩大助（以上は理事）

小林禎作、樋口敬二、渡辺義夫、岡林俊雄（以上は幹事）

という記事がまず目に入った。なつかしい顔ぶれである。しかしこれらの方々のうち、神原台長（支部長）、孫野、黒岩、小林先生方は既に故人になっているではないか。神原台長は支部長として、また孫野、黒岩、小林先生は単に北海道支部としてだけでなく、気象学会全体としても大活躍された方々である。またそのほかの方々も大学又は気象台を定年退官されていて、現役で残っているのは樋口先生と私だけで、私も来春定年退職である。22年の歳月を振り返って感慨深いものがある。なお次の役員会（昭和41年３月28日）からは菊地勝弘先生が幹事として加わっている記録も目についた。

場所の石田屋は駅前近くで、駅前通りを２、３丁いって左へ曲ったところだった。それはまた丁度道庁正門前の通りに面していた。そのころはなかなかしゃれた喫茶店で、そのむかいは少年時代よくいったエンゼル館という映画館があったが今はもう無いはずである。

上記役員会の主要議題は、昭和41年度気象学会秋季大会を札幌で開催することについてであった。その秋季大会は10月１～３日北大で盛況裡に行われた。シンポジュームのテーマは「日本海側の豪雪」でその座長は孫野先生、話題提供者は松本誠一、宮沢清治、石原健二氏と私であったが、私以外はもう定年退職されている。

北海道にとって降雪関係の研究の重要さはいうまでもないが、昭和38年度札幌管区気象台は、「石狩平野の局地的大雪の調査と観測」を総合的に大がかりに行い、その後の支部の研究ムードを盛り上げるのに大きな役割を果した。その後、北大と札幌管区気象台はこの日本海側の大雪、とくに石狩湾付近の大雪の研究に精力的に取り組んでいる。

今春の筑波大学での気象学会春季大会では、北大グループが、気象衛星、レーダー等を用いた石狩湾付近の大雪に関するすぐれた発表をしたことが特に印象に残った。菊地、遠藤先生方が中核となり、私の子供より若い年代の人達がはつらつと発表しているのをみて誠に頼もしく思った。

しかし気象学会大会等で降雪に関する研究発表では、必ずといってよいほど重要な発言（質問）をしておられた、孫野、小林先生方の姿が今はないことに、とても淋しさを感ずるのは年のせいかもしれない。

３０周年記念号に思う

高　橋　浩一郎

私が札幌管区気象台に赴任したのは、１９６８年の４月の初めであった。少しおくれて日本気象学会北海道支部長になったが、20年近く前のことで、大分記憶がうすれてしまったが、断片的ではあるが、いくつか思い出されることを書いておこう。

羽田を出発、飛行機で千歳についたとき、すぐ耳にしたのは、北大の田沢誠一、葛西俊之の両助手の殉職のことであった。４月４日に石狩川流域の積雪量調査のため、小型飛行機で観測中墜落したものであり、

誠に痛ましいことであった。葬儀の折りには、管区気象台を代表して弔辞を読んだ。

いまは故人となられたが、北大の孫野長治教授は、学会の理事であり、前からの知り合いであった。第二次世界大戦中の中谷宇吉郎教授をリーダーとする根室での大がかりな霧観測の折り、たしか陸軍少尉であり、これに参加され、私も参加した。当時のサーベルをさげていた姿が思い出される。

私は昭和13年頃から、学会の運営とも関係しており、気象事業の発展には気象学の研究が基礎と思っていた。そして、気象台と大学との連携が望ましく、孫野教授をよく知っていたことは都合がよかった。この年の12月10日には、札幌管区気象台で、学会支部と管区との共催の研究会を開いた。

この折りの実質的な管区気象台関係の世話役は小野寺晶夫調査課長だった。そして、研究発表だけではなく、北大の井上力太教授の大気汚染関係の特別講演もあり、集中豪雨と豪雪に関するシンポジウムも開かれた。粕谷光雄予報課長が座長となり、東京の気象研究所の松本誠一博士も参考にするなど、充実した研究会であった。

札幌にはわずか2年ほどしか滞在しなかった。だが、この5月末札幌を訪ずれた折り、支部だよりの30周年記念号を出すことを耳にし、当時のことがいろいろ思い出され、支部の発展をうれしく思った次第であった。

思　い　出

毛　利　圭太郎

札幌管区気象台在勤三年の間に、北大の孫野先生や菊地先生に御懇意にしていただき、大変お世話になり有難うございました。時々、北大の教室にお邪魔したことを思い出します。

学会のおかげで大学と気象台との間にいろいろ話し合いのチャンスがあり、交流できましたことは勉強になり、また大変有益であったと思っております。私も北海道上の寒気の立体構造に興味をもち、いろいろ解析を行ったことを思い出します。

今後の学会支部の益々の御発展をお祈り致します。

一年間の支部活動の思い出

内　田　英　治

私の北海道支部活動は僅か1年だった。昭和48年度のことである。管区技術部長として支部役員に選出され、北大理学部、低温研などの皆さんとはとくに交流が多かった。

今でも同じ思いであるが、私は、こと地球物理については、（恩師永田武もよく強調されるように）気象庁と大学とが良き協力をしない限り、世界の文明国としての実は上らないと考えている。札幌に赴任した時からその思いにかられていた。

たとえば、支部長選出についても、気持よく選挙が行われるよう当時の須田台長とともに気を配った。

丸山調査課長（故人）はじめ、気象台のスタッフも良く動いてくれた。孫野、黒岩先生（故人）とも、（もちろん現職の菊地教授などとも）親しくつき合えて楽しかった。小林教授（故人）とは高校の同窓生であり、彼の存在は大切であり、多く教えていただいた。

そして、北大の談話会や、学会の折りに、業務と学問の接点を共に話し合う重要性をひしひしと感じた。

市の環境調査には道庁からの支援もあったが、大学の方々のバックアップも大きかった。レーダー資料は大学の方々も随分利用された。

また、支部活動と直接の関係か否か忘れたが、電線着雪問題では、孫野、黒岩先生および若浜先生とも活発な討論をした。

雲物理関係では以前より親しい関係の菊地先生と交流を深めた。集中豪雨問題では、工学部の山岡先生、農学部の堀先生ともレポートの討論を行い、実りが多かった。

北海道には北海道特有の現象があり、同じ豪雨でも九州で起るものとは、メカニズムは違う。それにも拘らず、アプローチの手法には共通の問題がある。したがって、時には、できれば他の地方の人とも討論の必要性もあろう。

しかし、僅か１年間だったが、有力な方々とおつき合い出来て大変幸せと思っている。

これから、ＷＣＲＰ（世界気候研究計画）がスタートする。これには大変神経をつかって大学の方々とともに、文部省に折衝し、やっと測地学審議会の建議までこぎつけた。

これを通じて、先に述べた気象庁と大学等との協同の実が一歩前進することを切に願っている。また北海道支部が多かれ少かれ、この仕事においても発展されるよう祈ってやまない。

回　　想

粕　谷　光　雄

私が札幌に在勤したのは、昭和41～46年の５年間であるから、既に15年も以前のことになり、丁度、気象学会北海道支部創立30年の中間期に当る。私は北海道の気象部隊に居たことがあるので、昭和41年は20年ぶりの渡道ということもあるが、次の点でも忘れ難い年である。

未だ高度成長期にあったとは云え、積寒法の施行された直後でもあり、北海道では住宅、道路など積雪地における冬季の生活環境や産業立地の条件を雪のない内地並みに速かに改善しようとする情勢にあった。その上、昭和43年の開道１００年を迎える記念事業、昭和47年２月に開催される札幌冬季オリンピックの整備５ケ年計画とか活気に溢れ、気象業務も多端であった。

気象災害では、４年ぶりの北海道の冷夏で冷害が発生し、翌42年１～２月には道内で暴風雪やどか雪が相次いだ。

私が学会北海道支部と関係を持ったのは、７～８年に１回廻って来るという気象学会の秋季全国大会が10月に札幌の北海道大学で開かれた時からである。既に札幌の全員は大会の事前準備を春から始めその運営に頑張られた。私もこの大会では急に総観気象部門の司会を依頼され、不馴れの上に急いで総括報告をまとめねばならないなど、いささか困惑したことを憶えている。この時のシンポジュウムは「日本海側の豪雪」がテーマで盛会であった。恒例の大会出席者全員の写真撮影が終った時の北海道特有の秋晴れの空の色は忘れられない。

今日どうか知らないが、当時の北海道支部では、比較的会員の多い札幌の北大、管区気象台、函館海洋気象台が持ち廻りで３年に１度支部大会を開いてきた。時には、地方会員のために管区の研究会に引き続いて開いたこともあった。五稜郭の桜の下で、小樽商大に居られた加茂先生を囲んで関係者が集まったのも、函館の支部大会の後だったように思う。

学会の北海道支部で取り上げられた問題は、降雪、雪氷、積雪、流氷、電線着雪など、北海道特有の現

象が多かったが、北大、気象台、北電など所属会員の専門分野から見ると、研究の対象にする現象のスケール面で大きな開きがあった。この傾向は昭和40年代の始め頃までは目立ったが、私が札幌を去る40年代の後半には、各分野の共通性が大きくなり、支部内での相互の理解が深まったように思われた。これは、高層気象資料の充実、レーダーや気象衛星など新しい資料の利用の普及、数値予報モデルの急速な進歩などによることが大きい。海面状態の影響や雲物理の過程の一部を含めた多層数値予報モデルの実用化が始まり、予報者にも降水予報のためばかりでなく、予想天気図の作成に雲物理や海氷の問題が不可欠となってきたためであろう。

孫野先生はじめ北大の方々には、雪の共同研究を通じて大変お世話になった。

この間、昭和43年４月、会員（北大）の田沢、葛西両氏がセスナ機で石狩川源流域の積雪観測中遭難された痛ましい事故は、しばしばお会いしていた方々だけに、今も当時の状況が鮮明に記憶に残っている。

謹んで両氏の御冥福を祈らせていただきます。

思　い　出

杉　浦　次　郎

秋山支部長より支部役員をしていた頃の思い出などをというお手紙をいただきまきた。

私は43年４月から47年３月まで函館に勤務したのでその間支部理事だった訳ですが、記憶に残っているのは44年の秋、稚内で支部主催の公開講演会があり、私は高橋支部長のお供をして稚内に参り、講師の一人として話をしたことです。当時の稚内の台長は内川さんでした。その時の講演要旨を持っていたはずですがすぐには見付からないので、年月日・演題も分りませんが、多分海上災害に関する話をしたように思います。

天気15巻４号によりますと43年の支部役員は（敬称略）支部長は高橋浩一郎、常任理事は孫野長治、安斎政雄、小野寺晶夫、理事は内川規一、粕谷光雄、私となっています。私が出席した最初の支部役員会は多分43年春の官署長会議の時で、私はその時初めて孫野先生にお会いしました。その時孫野先生から先生の教え子で当時函館勤務だった山本孝二氏（現気象衛星室長）のことをよろしくといわれたことを覚えております。

では支部創立30周年記念講演会の御盛会を祈ります。

１９７１年秋期大会の思い出

中　岡　裕　之

北海道支部の皆さん、大変御無沙汰しています。かえりみますと、小生昭和５０年の夏に北海道を離れて新潟へ転任して以来、大部分の皆様にはお会いしていません。其後昭和５７年４月、三重県の津地方気象台を最後に気象庁を退官して岐阜へ帰り、早や５年になりました。其の間昭和５８年１０月から今年３月まで、３年半第二の職場として日本気象協会岐阜支部へ勤めましたが、その仕事も退職して、今は全くフリーの身となりました。

さて、日本気象学会北海道支部は今年で、創立３０周年を迎えるそうで、お目出度うございます。いつの間にか３０年とは早いものですね。

小生は昭和３９年の５月から５０年の７月まで札幌管区気象台に在籍し、その間昭和４3年4月から４9年４月まで、気象学会北海道支部の幹事として事務局を担当しましたので、いささかの思い出と感想を述べさせていただきます。

当時の印象に残る思い出と言えば、昭和４６年秋の秋期大会に北海道支部が当番支部をおおせつかり、その前年４５年から会場の設定と、大会運営費の調達に苦労したことです。当時小生は支部幹事長として、また事務局の責任者として大会の成功に向けて奔走しなければなりませんでした。

会場の設定については、第一・第二・第三会場が近距離で揃っており、総会のための大きな会議室もある所となると、当時１００万人と言われた札幌市広しと言えども、そう簡単に見つかるものではありませんでした。

菊地勝弘先生に北大の方の御都合を伺ったところ、同時期に行事があって会場としては駄目でした。種々検討した結果理事会にはかって会場を北海道自治会館に決めたのは、一年前のことでした。

運営費については、東京本部から支給されるほかの不足分について上積みすべく、今は故人となられた丸山栄三理事と共に夏の暑い日、関係方面へお願いに回ったことが、昨日のように思い出されます。

かくして、１９７１年（昭和４６年）秋の大会懇親会も無事成功裏に終り、北大孫野先生や気象台毛利先生を囲んで、打ち上げ会のビールを飲んだ時は、ほっとして全身の力が抜けたことを憶えています。

話は変わって、今年の研究発表会のプログラムを拝見しますと、北海道西岸の小低気圧が取り上げられており、古くて新しい問題だと思いました。小生の頃の小低論議は、レーダーはあったものの、総観気象学がまだ幅をきかせていた時代で、今日の気象衛星の技術や数値予報の発展を思えば、昔日の感があります。

北海道支部の皆さん、西岸小低気圧と降雪の振舞いの解明に、今後尚一層精進されることを希望して止みません。

（１９８７年5月２３日記）

思　い　出

八　田　琢　哉

日本気象学会北海道支部には、今年で創立30周年を迎えられるとのこと、心からお祝い申し上げます。

振り返って見ると、昭和51年４月に札幌管区気象台調査課勤務となり、３ケ年を過ごしたが、そこに事務局が置かれていたこともあって、北海道支部とは密接に関係することになったのである。

当時の支部長は、今は亡き北海道大学教授孫野長治先生であった。支部としては、活発な活動を図るべく、種々検討されていた。その結果は、活発に動いたと言える一時期だったように思っている。

支部活動の一つとして、昭和53年10月に地方講演会が実施された。これは知識の普及と啓蒙を目的とし、その土地に関係の深いテーマを中心にして行うというものであった。この時は、網走市において流氷と気象の講演会を開催した。地元気象台、市の多大な協力があって非常に盛会であった。このようなこようなことが待望されているのだとの感を深くした。

昭和52年10月には、学会の秋季大会が札幌で開催された。着々と準備を進め、実行委員会も設けられて万全を期された。この為立派な大会の運営が行われ、全国からの参会者に満足してもらえたものと思って

いる。この時思わぬ苦労があったことを思い出す。会場は、落成開館したばかりの札幌市教育文化会館を借り切った形で確保でき、最適なものだった。ところがこの中に、窓にブラインドだけで暗幕の無い会議室があった。スライドには不都合である。臨時に暗幕を取り付けねばならず、材料捜しから手間まで大変だったのだが、大会だけは何事もなかったように円滑に行われた。

支部だよりについても思い出す。新しい企画として、道内の気象学関係の研究者並びに団体の紹介を掲載することになったことである。相互に研究の内容を知ることが、その後の研究活動に役立つであろうとの目的であった。これはアンケートに基づいてまとめられた。

種々の制約のある中で、役員の方々の御努力と関係者の御協力で、成果があがっていたことを、今懐しく思い出すものである。北海道支部の今後益々の御発展をお祈りする。

札幌2年間の思い出

東京管区気象台　清　水　正　義

気象学会北海道支部30周年の記念に「支部役員をしていた頃の思い出を」という依頼を受け、戸惑っています。私が札幌に勤務していたのは昭和52・53年度の2年間でしたが、気象学会についての思い出をと言われて戸惑うほどに、私が何も苦労してなかった事になり、今さら恥ずかしく思っています。

私が札幌を去る直前の送別会で、2年間の大きな出来事として、初めの年の夏の有珠山大噴火とこれに関する業務の繁忙と、二年目には自動車の運転免許を4カ月もかかってやっと取得した事とをあげました。しかし、気象学会に関連した事となると……と思いをめぐらして、「そうだ、最初の年は確か秋季学会が札幌で行われたはずだ」、そして2年目は……とさらに考えて、「網走で海氷の講演会をやったはずだ」と思い出した次第です。

昭和52年秋季大会は、北大等の協力を得、管区調査課長だった八田琢哉氏らの御努力で準備が進み、確か新築されたばかりの札幌市教育文化会館で盛会裏に開かれましたが、当時の学会での主要トピックが何であったかの記憶もないのはお恥ずかしい限りです。

しかし当時、気象業務面では、静止気象衛星ひまわりⅠ号が打ち上がった直後ということと、アメダスの全国展開が終りに近づきつつあり、自主的な勉強会や地区研究会などで、衛星資料やアメダス資料の利用が盛んになりつつある時期でした。当時、何かの席で、「アメダス資料は数年もすれば完全に気象業務の中に溶け込み……」と言ったような気がしますが、10年経たずして、ＴＶを通じて茶の間にはいりこみ、アメダスから得られる雨量分布や気温分布は、ひまわりの雲画像とともに、完全に国民生活の中にまで溶けこんでしまいました。もう10年もたったかという気持と、その間の気象情報の国民生活への滲透の速さに驚かされます。

さて、翌53年度の学会行事の計画中に、当時の伊藤管区台長が、「何か北海道に特有の現象――例えば海水について講演会をやったら」と言われたのがきっかけで、網走で「流氷と気象」の講演会を開くことになりました。このため主として網走地台（当時の台長は小塙盤雄氏）の御努力と網走市の御協力とを得て準備も進み、函館海台・網走地台・北大低温研・第1管区海上保安本部からの講演者を迎えて、この講演会（昭和53年10月14日）をまずまずの盛会裏に終えることができ、ホッとしましたが、人口4、5万の網走市にとってもかなり大きな文化的行事だったのではないかと思っています。

この講演会の翌日、私は斜里から知床五湖まで足を伸ばし、秋雨煙る中を紅葉に映える五湖めぐりを楽しみましたが、何時の日かもう一度行きたい景勝の地として知床五湖を頭の隅に残しております。

昭和５２年度秋季札幌大会の憶い出

伊　藤　　宏

私が札幌に在任したのは、昭和５１年から昭和５４年までの３カ年であった。最初の年の支部役員や幹事の顔ぶれで、直ちに憶い出されるのは、大学側では支部長の孫野先生と幹事長の播磨屋さん、気象庁側では理事の関口・八田両氏、幹事では大川さんくらいで、その他のかたがたは憶い起すことができなかった。この稿を書くにあたって、支部だより２２号を見て、上記の他に石田・井上・遠藤（北大）の皆さん、和田さん（函館海洋）と村松さん（札幌管区）のかたがたで構成されていたことを見るにおよんで、いろいろなことを思い出すことができた。

さて、昭和５２年度の秋季札幌大会は、本来の順番からは、前年の５１年に開催されるはずのものであったが、たまたま札幌管区気象台の創立百周年の記念行事と重なったため、学会の大会を翌年に変更してもらった。そのため、ご迷惑をおかけしたむきもあったかと思うが、北海道支部にとっては大会を新築したばかりの教育文化会館でもつことができた。会場は新築そうそうなので大変きれいであることは申すまでもないが、その大きさが大会の規模にぴったりだったと覚えている。

もう一つの思い出は大会運営費に関連したことがらである。当時より以前では、学会の財政規模は今日より小さかったので、地方大会にたいする本部からの交付金は少なかった。また、今日のように大会参加費を徴収することもなかった。それで、地方大会の会場を外部に求めた場合、往々にして運営費が不足し、それを寄付金で賄なわざるをえなかった。じつは、たしか昭和５０年の大会の時と思うが、私も少々お手伝いをした経験があった。それで、札幌大会でもその必要が生じた場合には、その時の経験を生かそうかと心の内でひそかに思っていた。

しかし、札幌大会の場合には、本部からの交付金も以前に較べて増加したし、また、支部が若干の繰越金を保有していたこと等々のために、恒例になっている所に少額の寄付をお願いしただけで充分であった。

こんな経験からも、気象学会がだんだん盛んになってきた、また、社会全般がだんだんに豊かになってきた過渡期の一断面が見えるように思う。

３０年を振り返って

藤　原　滋　水

私が北海道支部の役員を致しましたのは、函館海洋気象台長時代の昭和５５年４月から５８年３月までの間であったと思います。そのお陰で札幌へ出張する機会が増え、出身校であった北大の旧友に会う幸せにも恵まれました。同じころ、釧路の「海霧特別観測」が科学技術庁の特研で行われ、孫野・菊地両先生には委員会でご一緒し、一層親しくさせて頂きました。

気象学会の大会が札幌で行われました時は、寺内台長の下でお手伝いを致しました。寺内台長は若年の時分からの親友であり、一緒に勉学をしたり、激論を交したりした間柄でしたから、すべてツーカーで話が通じ合いました。

さてそのころ、道内写真展に函館台長賞を出したいから三千円を寄付するよう要請されました。優秀作品に対する奨励金だということです。台長が出品してもよいのかと聞きますと、前例はないけれど、応募は誰でも自由だということなので、その年から賞金も出す代りに、応募もすることに致しました。これが写真の勉強を本格的にやり出した初めです。「藤原君、チャンスは二度ないと思って、十分に念を入れて一枚の写真を撮りなさい」と学生時代教えて下さった故中谷宇吉郎先生のお言葉を、何時もかみしめておりました。幸いにも最初の時は「恵山」の写真で二等賞を受け、最後の年函館で行われた時には、一等の金賞を「当別トラピスト修道院の並木」で受賞しました。

東京へ転勤後、写真熱は高まる一方で、気象庁講堂での写真展開催、自然科学写真協会への入会、同協会写真展に三年連続入選、その間富士フイルム・コダック等の多くのコンテストにも入賞するようになり、雲とか気象関係の写真家として少しは知られるようになりました。百科辞典や単行本等に写真を提供することも多くなりました。こうしたことも北海道の皆様のお陰と感謝致しております。

今年の協会展は５月２９日から６月４日まで東京銀座の富士フォトサロンで展示されます。同封の一枚は５７年８月、利尻富士の風下に現れたつるし雲と笠雲の写真です。富士によく似た孤立峰ですが、山のスケールが小さいので二種類の雲の間の距離が比較的近いのにご注目さい（１２９ページ写真参照）。

13年間の思い出

北大理学部　**播磨屋　敏　生**

この原稿を書くにあたり、幹事歴を調べてみると、４５年から４９年までは幹事、４９年から５８年までは幹事長として合計１３年間、創立以来のほぼ半分の期間にわたって支部活動をお手伝いしたことがわかりました。

思い出となれば、やはり一番目は全国大会の運営となるでしょう。４６年の自治会館の時には、第１会場となる大広間用に特大のスクリーンを作り、それを前日に天井からつり下げたのですが、その会場で午後８時に終る予定の結婚式が大分延びてしまい、閉館時間の９時までに終えるように全員で苦労したことが思い出されます。

その次の５２年の教育文化会館の時には、暗幕で苦労しました。教育文化会館は、その年の１０月１日にオープン予定でしたので、きれいな会館でやろうと建物の出来ないうちに申し込みました。夏の頃下見に行きますと、会場にはブラインドはあるものの暗幕の設備がないことを知りました。それで特にお願いして黒い農業用ビニールシートで窓を覆うという大作業になった次第です。次の５７年の時も、他の設備が良いので、また暗幕設備を覚悟の上で教育文化会館にしました。幸いな事に、その年の春に会館で暗幕を設置したので、我々は苦労せずに済みました。

二番目の思い出は、地方講演会です。４７年の千歳へは毛利圭太郎さんと、５３年の網走へは清水正義さんと、５４年の釧路へは岡村存さんと、５６年の函館へは寺内栄一さんと同行させていただきました。そして運営には、各地の気象台関係者に大変お世話になりました。

幹事をやめてからも、６０年の旭川の地方講演会には講師としてお手伝いし、今年の夏季大学には講師、全国大会運営には実行委員としてお手伝いすることになっております。幹事在任中いろいろな方々にお世話になった事に対するお礼として、今後は一支部会員としてお手伝いするつもりでおります。